
足音がひとつ

睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足音がひとつ

【Nコード】

N7572D

【作者名】

睦月

【あらすじ】

中学校一年生の綾瀬未来は、はじまったばかりの学校生活をenjoy!していた。が、ある日の放課後、突然、昔の友達楓が現れる。過去の善行、過去の罪。そして……。楓。過去と現在をつなぐのは、たった一人の、幽霊でした。

1 か・・えで？（前書き）

初めての連載&ホラー小説なんで、つながりとか分かりにくいかもしれませんが・・・すいません。

1 か・・えで？

放課後の、中学校。

もう夕方とはいいいがたい時刻の、校舎の中で。

薄暗い電灯の、美術室で。

一人絵を描いている少女がいた。

あやせみくる
綾瀬未来。 13歳。

ただでさえ気味悪い夜の校舎なのに、独りぼっちでいるとさらに心細い。

だが、彼女はこの絵を仕上げなければならぬ理由がある。

二週間後の美術館に出展する絵の、提出期限がもう迫っている。

真っ白なキャンパスに、せめて下書きだけでも仕上げなければならぬ。

(・・・それにしても・・・。)

絵を描きながら、みくるは思った。

(まじで、外暗すぎでしょ・・・。うち、どーやってかえんの??)

「・・・ま、帰れない暗さじゃないけどね・・・」

ボソッと呟いたつもりの一言だったが、誰もいない校舎に響くには十分だった。

自分の声にびつくりし、その余韻が消える頃。

・・・ひた・・・

「・・・!？」

ひた・・・ひた・・・ひた・・・。
(・・・当直の先生かな・・・?)

「・・・せつ・・・先生？」

ひた・・・ひた・・・ひた・・・。

「もう閉めるんですか？」

足音の持ち主は答えない。

「先生？ 先生？」

ひた・・・ひた、ひた、ひた。

足音が教室に入ってきた。

足音だけが。

「え・・・」

思わず声が出た。次の瞬間^{とき}。

「何？ 何？ な・・・何のいたずらなの?!」

みくるはほとんどパニック状態で叫んでいた。

ひた、ひた、ひた、ひた。

と、足音は依然答えず、みくるに迫ってくるばかりだ。

足がすくみ、腰が抜けて、イスから立ち上がることも出来ずに。

みくるはただ体をこわばらせ、恐怖に満ちた瞳^めで何かを見つめていた。

そこに在^{いる}る、何かを。

ひた・・・!!

足音は止まったが、何かの気配もみくるの目の前で止まった。

「・・・な・・・に・・・?」

口が乾き、のどが引きつり、やっと声になったのは、その一言だけだった。

何？ あんたは、誰？

「……み……くる、ちや……」

か細い声とともに、一瞬だけ、蒼白く、おびえた表情かおの少女が現れた。

透き通った身体は、それがもう生き物ではない事を証明していた。その子を見ると、蒼白かったみくるの顔が、一段と蒼くなった。

白い、という表現を使いたくなるような色だった。

みくるは力チンと固まり、身体は石に棒が刺さっているかのごとく強張っていた。

「……か……かえ……で……??」

ワケがわからないという顔でそう呟いた、その直後。

（怖い！）

その感情が身体を支配し、一瞬にしてまた動けるようになった。

それと共に、何かかえでの気配も消えた。

「帰らなきや……また、楓かえでが来る……！」

まだ蒼い顔で、目はどこか遠くを見ながらつぶやいた。

その一分の後には、みくるはもう、荷物を持って生徒玄関で靴を履いていた。

（今の事は、忘れない。忘れなくちゃならない。）

思いながら、家路についた。

1 か・・えで？（後書き）

どうでしょうか？

まあ、こんな感じで進んでいきます。

楓との関係とか、分かりにくくしたつもりが・・・。
あらずじ読んでたらネタばれですよね・・・。

まあ、それはそれとして、見苦しくなかったですか？
これからも、読んで行ってくれると嬉しいです。

2 流歌

翌日。

キンコーンカーンコーン……。。

「きりいゝつ、れえゝい！」

日直の気の抜けた号令がかかった。

『さようならあゝ』

「ふう……。」

みくるはため息をひとつついた。

（長かったな、今日一日。）

どんなに振り払おうとしても、絶対に耳にしがみついて放さない、あの声。

『……。み……。くる、ちゃ……。』

みくるは、ぷるぷると頭を振って、忘れようと頑張った。

と、そこに一人の少女が親しげに近寄ってきた。

「みくうゝ」

なかなかかわいい少女である。

「いつしかあえろっ？」

歌うように尋ね、みくるの顔を覗き込む。

彼女の名前は、伊十院^{いじゅういん}。
伊十院^{いじゅういん} 流歌^{るか}。

みくるの親友と呼べる娘の一人だ。

「あ、でもでも……。」

体を起こしながら、心配そうな顔になる。

「昨日、絵え描けたあ？」

彼女も美術部の部員である。

もつとも、彼女の絵はもう既に、綺麗に色を塗られて美術室に展示してあるが。

「ううーんと……。まだ、描き終わってない……」

「じゃあ、今日も残るんだ？」

「ええ……。っと……。今日は、帰る……。かな……。？」

「え？ でもいいの？ まだ仕上がってないんでしょ？」

「うん、大丈夫。あと、色塗っておしまいだし……」
みくるは嘘をついた。

流歌は、何にも出来なさそうな顔をしていて、男子にも人気だが、実は真逆で、何でも出来る、優等生だ。

で、あるからして、提出期限等には、何気に厳しい。
早い話が、しっかりしているのだ。

「でも、早めに仕上げといった方が……」

と、心配するのも彼女ならうなずけると言う事だ。

「だーいじょおぶだってば！ ほら、帰ろ？」

「うん、わかった」

「でさ、その時の美奈の顔ったら……」

「きやははは！ あの冷静沈着な美奈がねえ……」

下校中、他愛もない話で盛り上がる。

流歌と話をしている時は、あの事を忘れられる。

（このままずっと、こうやって話をしていたらいいのになあ……）

だが、楽しい時間はあっという間に過ぎていく。

十分程度で、流歌との分かれ道まで来た。

「じゃあ、また明日、学校でねえ」

「うん、ばいばあい」

「え・・・・・・・・・・？」

た・・・

ひた・・・

「ひっ・・・・・・・・！」

みくるの顔はみるみると恐怖の表情に変わった。
今、確かに、聞こえた。

うちの足音の後に、もうひとつ足音が。
ウチが足を止めた後に。
もうひとつ。

こわい・・・こわいこわいこわい・・・。

振り向いちゃいけない

振り向きたくない

けど

振り向かなきゃいけない

事実を知らなくてはいけない。

一瞬の間をとつて、みくるはゆっくりと振り向いた。

「・・・・・・・・誰も・・・いない・・・・・・・・？」

「きゃあああああああああああ！・・・・・・・・！」

だだだだだだだだだだだ
つっつっ！！！！！

みくるは、走った。

後ろに、何かいるから。

ひ
た
・
・
・

ひたひたひたひたひたひたひたひたひた・ ・ ・

そして、それはついてきているから。

「あ……足音なんか、聞こえない！！聞こえない、聞こえない！！」

「聞こえない聞こえない聞こえない！！ 聞こえてない！！」

全速力で家まで帰ると、ドアをバツと乱暴にあけ、
 バタン！ ガチャ、ガチャ！ ガツ！
 鍵を二つ掛け、チェーンをした。

さすがに家の中までは追ってこない。

「は．．．はあ、はあ、はあ、はあ．．．」

みくるは息をととのえて。

ばくばくと鳴り響く鼓動を抑えて。

何事も無かったかのように、一言。

「ただいまあゝ！」

みくるは、普通のただいまを言う事で

日常に戻ろうとしたのだろうか？

何事も無い、日常に。

それは、すでに

不可能に違いない。

2 流歌（後書き）

3 恐怖

毎日、だった。

毎日、流歌と帰った。

毎日、他愛ない話をした。

毎日、あつという間に時間は過ぎ、

そして、毎日……。

今日は、雨だった。

「じゃあ、みく、ばいばあい」

「う……ん、ばいば……い」

流歌と別れたら、気を引き締めないといけない。

楓が、この頃毎日やってくる。

ひたひたひたひたと、ついてくる。

振り向いてはいけない。

何事もないように、ふるまわなければならないのだ。

ばらばらばらばら……。

傘に雨が当たる。その音が、心地いい。

楓の足音^{そんざい}を、消してくれる。

ぴちゃぴちゃぴちゃっ・・・

わざと、水を跳ね飛ばしながら歩く。

ぴちゃっ、ぴちゃっ・・・

ひたっ、ひたっ、ひたっ・・・

ああ、でもやっぱり聞こえるんだよね、どうしよう。

もう、みくるは慣れてきていた。

自分の後ろに足音がすることを、恐れなくなった。
だが、

自分の後ろに、楓がいると思うと、やはり怖い。

あの、寂しそうな、悲しそうな、青白^{かお}い表情をして。

歩いていると思うと、やはり、足音を恐れずにはいられない。

ガチャッ、

「ただいまあゝ」

バタンッ

ガチャッ、ガチャッ。

カチャカチャ、カチャンッ。

うん。そうなんだ。

もう、うちには日課になってるよ。

何事もないようにただいまを言う。

その直後、扉を閉め、鍵を二つ掛け、チェーンまでする。

それは、やっぱり楓^{あいつ}が怖いからなんだろうね。

今日は、ちょっと違った。ほんの少し違った。

扉を閉める時に、隙間から外を見た。

ああ、そっか。

足音が、一人分多いつていうことは。

足跡も一人分多いつてことなんだね？

泥の上についている、足跡。

足跡が、足音が、ひとつ。

余計に。

楓は、きつと、ずっとついてくるだろう。

楓は、きつと、怒っているんだ。

怒って、そして悲しんでいるんだ。

あの、暗くて悲しい、寂しくて青白い表情かおの中で。

バタンツ。

足跡を視界から消して、鍵を掛けた。

チェーンも掛けた。

そして、

みくるは、きつと、何事もないようにふるまい続ける。

みくるは、でも、鍵も閉めるしチェーンも掛ける。

みくるは、楓を恐れているから。

自分のした事と、過去の思い出と共に。

4 提出期限

「みく！ 今日に残るんでしょうね?!」

放課後、流歌がみくろの机にやってきて、追求した。

「え………？ 今日？ ……か……えり、たいな………？」

みくろの答えを聞いたとたん、流歌の顔が怒りの色に染まった。

（ヤバッ……イー!!）

思ったとたん。

バン!!!!!!!!!!!!

「いい加減にしなよ!!!! もう、絵が出来てないのあんただけだよ!!!」

流歌が切れた。

みくろの顔はサツと蒼くなった。

流歌が怒るととっても怖い。

規則などが絡むとなお一層怖い。

「……………」

あまりの迫力にも言えないでいると……。

「もう二週間になるよ?! ずっと放課後になると帰っちゃうじゃん!」

「……………だつて……………」

「だつて……………何?？」

みくろはつまつた。

（だつて、楓が……なんて言えるワケないよねえ……）

なんとも言えず黙っていると、

「ふう……………。ま、言いたくないならいいけどね？ でも、今

日こそは」

冷静になつた流歌が言い聞かせるように言った。

「絶対に。絵は完成させないと……ね？」

「う……ん……」

さすがにそれは、みくるも思っていた事だった。

もう、提出期限は三日後だ。

下書きを仕上げて、色を塗って……間に合わないかもしれない。

「じゃ、じゃあ、流歌——！」

みくるはいいことを思いついた。

「な……何？」

「流歌も一緒に残って、アドバイスしてよ——！」

「え……？ うん……分かった、いいよ！」

「よかったあ。ありがと！」

「うん。じゃ、そうと決まったら、ほら、行こ？」

「うん」

流歌は、カバンを持つと、廊下へ歩いていった。

楓はこれまでも、流歌と一緒にの時は足音をさせなかった。
だったら……

（流歌と一緒になら安心だし……。大丈夫、大丈夫）

立ち止まって考えていると、

「どうしたの？ 早く行こ？」

扉から頭だけを出して、流歌が聞いた。

「うん、なんでもない」

みくるもカバンを持って、小走りで流歌の方へ行った。

4 提出期限（後書き）

いよいよ次話から、色々な事が明らかになっていきます！
お楽しみに

5 『朱色』と『赤』（前書き）

更新が遅くなってすみませんでした！
どうぞ、続きをご覧ください。

5 『朱色』と『赤』

ふたりで美術室にこもってもう三十分。
今の所、何の変哲もなかった。

（やっぱり、大丈夫だったんだ）
みくるは安心していた。

最初の十分で、みくるは絵を書く事に集中し始めた。

（なんてったって、後三日だしね・・・急がなきゃ間に合わないし）
さつきから鼻歌を歌っている流歌を見ると、

なんだか適当にシャーペンで絵を描いているようだ。

みくるはまた、絵に視線を戻すと、色を塗っていった。
しばらくすると、

（・・・あ・・・。この色って・・・こっちの方がいいかなあ・・・
？）

「・・・ねえ、流歌」

「・・・ん？・・・」

なんとも気のない返事だ。

さつきからずつとこんな様子で、いい加減みくるも飽きてきた。

「ここは・・・どうしよう・・・」

流歌はみくるの絵をチラツと流し見て、

「どお〜にでも。お好きなよお〜に」

ニヤニヤと笑いながら呟く。

「・・・もお〜！ そんなんじゃアドバイスにならないじゃん！」

不満そうに顔をしかめてみくるが言つと、

「何カン違いしてんの？ その絵を描くのはあんたであつて、あた
しではないの」

まるで小さい子に言うように、意地悪く笑いながら、流歌が言い聞
かせた。

「そおだけどお〜・・・」

「はい！ 描く描く！」

「もぉ・・・」

みくるは不満そうに筆を取った。
やっぱりこの色でいいや。

ペタ・・・

キャンパスに筆を置いたとたん、

「え・・・?! その色って変じゃない!？」

「うえ・・・?」

「こつちの色の方がいいよ。このキレイな朱色・・・」

（なんなの？ まったく・・・。さっきは自分で描けとか言ってた
くせにいゝ・・・）

少々不満だったが、やっぱり流歌が選んだ色の方が綺麗だと思った。
（ううゝん・・・。口出しできない・・・）

「そうだよね、やっぱり流歌のほうがセンスあるじゃん！」

「そんな、まさかあゝ！ アタシより上手い人なんていっぱい居る
しいゝ」

とは言いながらも、流歌も嬉しそうな表情だった。

「あ、あと、この朱色も綺麗だけど・・・。もうちょっと赤を足
した方がいいかも・・・」

と言いつつ、みくるの絵の具入れから赤い絵の具と筆を取り出した。
筆に絵の具を少し出し、それをパレットの上でキレイに広げていく。

「ほら。さっきの朱色と混ぜてみればゝ・・・」

と、微妙な色合いで朱色と混ぜていく。

筆を細かく動かし、マール模様みたくして・・・。

「はい。このまま塗ってみて？」

「・・・う、うん・・・」

流歌の言う通り、紅葉に朱色と赤のマールを塗ると・・・

「・・・うわゝ・・・」

「ね？ こうした方が、葉に動きが出るし、紅葉の微妙な色も表現
できるでしょ??」

「うん、うん！ 流歌すごーい！」

「えへへへ・・・」

と照れくさそうにほっぺをかく姿も、なんだか憧れる。

「じゃ、続きは自分で描いてね？？」

「わかってるって」

しばらくは黙って絵を描いていたが、
その沈黙は『音』によって破られた。

・・・ひた・・・

昨日までのみくるなら、分かっただろう。

これが何なのか。

これは誰なのか。

だが、平和な時間を一時間過ごしてしまったみくるには・・・
不思議なくらい。

分からなかったのだ。思い出せなかった。

「ん・・・？ 誰か来たのかな・・・？」

最初に気づいたのは、流歌だった。

「ん？・・・流歌、見て来てよ」

「ん……」

流歌は席を立つて、扉に近づいた。

そして、頭を出して辺りを見わたした。

ひた……ひた……ひた……ひた……

サー、と流歌は自分の顔から血の気が引いていくのが分かった。

「嘘……！ 誰も居ないよ……？」

「え？ 嘘……！」

『嘘……』とは言いながらも、みくるは分かった。

言った瞬間に思い出した。

そして、大変な恐怖に駆られた。

気が遠くなりそうだった。

「やだ……！ 気持ち悪い……！」

流歌のその声で現実に取り戻されたが、代わりに、とてつもない恐怖が襲った。

「やだやだやだやだ……！ 怖い、怖いよ……！」

「誰……？！ 誰か居るんでしょう……？」

と、流歌も半ばパニック状態で、必死に見えない人を探す。

「居るわけじゃないじゃん……！ その足音は……！ その足音は……！」

「やだ……！ やだよ……！ 怖いよ……！ 誰……？！ どこに居るの……？！」

「その足音は……！ それはあ……！」

「何……？！ 何なのみくる……？！」

「それは……！ 楓の足音だから……！！……！！……！」

「……」

一瞬の、沈黙。

依然、足音はひたひたひたと近づいてくる。

「……え……？」

先に口を開いたのは流歌だった。

「その足音は・・・楓のだって、言ってるの!」

「楓?! 何馬鹿言ってるの?!」

「ずっと! この二週間! ずっとあの子がついてきたの!」

「そんなのって! ないよ!」

「あの子の足音! あの子の姿! ずっとずっとついて来たの!」

「あの子は! もう死んでるの!」

今度は、流歌が大声を出す番だった。

ひた・・・っ!!

足音は、止まった。

確かにとまった。

流歌の目の前で。

「逃げて! 目の前に居る!」

「きゃあああああ!」

流歌は後ろを向いて走り出した。

ガクンッ!!

3歩も走らないうちに、流歌の体に衝撃が走った。

ドサッ!

と音がして、流歌の体は床に沈んだ。

6 流歌Ⅱ 楓・・・？（前書き）

いよいよ、物語が大きく展開していきます！
どうぞ、続きをご覧ください！

6 流歌Ⅱ 楓・・・？

「流歌つ!!!」

みくるは夢中で流歌の元へ駆け寄った。

「流歌っ！ 流歌！！ 流歌あああ！！」

何が起こった??

自分の親友に、何が？

必死で、名を呼んだ。

無我夢中で、彼女を揺すった。

「流歌！！」

何度目かに名前を呼び、何度目かに体を揺すった時。

「う・・・」

微かに反応があつた。

「流歌」

安堵の息をついた。だが、流歌は起き上がろうとしなかった。

「……平氣……？」

「う．．．．．＜．．．．．」

「どこか痛いのか？ 大丈夫？」

「う………つく………く………あ………つく………」

「流歌あ!!!」

[illegible]

ゆつくりと、流歌は起き上がった。

彼女のものではない、微笑と共に。

「流歌？」

「きやははははははははははははははははは……！」

笑いと同時に、その場の空気が凍った。

「……流歌……じゃない……」

その事実^{その}に気づいたみるは、首を振りながら、彼女から離れた。

「あんた……楓?！」

「えゝ？何言つてんのぉ？あたしだよ？流歌でしょ？」

と言いながら、かえで流歌は立ち上がった。

「違う……違う!! あんたなんか流歌じゃない!!」

みくるはあとずさった。

居る。

今まで、ずっと自分を苦しめてきた奴が、そこに居る。

「流歌は?! 流歌を返してよ!!」

「ええ？？」
「だから、あたしが流歌だって、言ってるじゃん？」

「何でこんな事に……なっちゃったの……?」

「
・
・
・
・
・
・
だ
っ
て
・
・
・
・
・
・
」

かえで
流歌は一瞬唇を噛みしめ、うつむくと、

まったく違う表情で、再び顔を上げた。

「……あの時の事、あたしは忘れないんだもん……？」

その瞳^めには、悲しみと、哀れみと、小さい怒りが浮かんでいた。

「……みるちゃんも、忘れてないんでしょ……？」

「……その口調……。あんたやっぱり楓なんですよ!？」

6 流歌Ⅱ 楓・・・？（後書き）

いかがでしたか？

この後は、楓とみくるの過去が明らかになっていきます！
どうぞお楽しみに

7 過去の善行（前書き）

今回から、二話に分けて過去の話を綴っていく予定です。
楓との関係も明らかになりますよ

7 過去の善行

「楓!!」

怒りを含んだ叫びが教室に響いた。

「……え……?」

楓は怯えたように、長い前髪の方こうから、チラリと声の主を見た。

「え? じゃねえよ!! あたしのカバンに触らないでよ!!」

「……え……あ……ゴメン……」

楓は自分の側にあつたカバンから一歩遠のいた。

「ゴメンじゃねえよ!!!」

沙絵はものすごい剣幕で駆け寄ってきて、自分のカバンを掴み、また戻っていった。

「あああ、やだやだ! カバンが穢れる!!」

ため息と共に愚痴を吐き出しながら、沙絵はパンパンとワザとらしくカバンを叩いた。

「きやはははは、あんなに言ったらかあいそうじゃん!!」

沙絵の友達、魅華はそう言いながらも、本当にそう思っているわけではなかった。

「はあ?! だってムカつくじゃん!!」

「まあ、分かるケド」

「なんかねえ、あいつの態度見るとイライラしてくるんだよねえ」

「うんうん」

魅華は、同感! とうなずいた。

「でもね? あいつにもひとつだけいいところあるんだよ?」

「うっそだあ!」

「ホントだつてばあ！」

「じゃあ、言ってみ？」

楓は遠くで、聞き耳を立てていた。

いつも自分をいじめている沙絵が、今日は自分をほめている？

あたしのいい所ってどこだろう？？

静かに、期待していた。

「うちの、ストレス解消になつてゐることおー！」

体が凍った。あたしが？

あたしが、沙絵ちゃんの、ストレス解消になつている？

たった一つのいい所が・・・ストレスがなくなる事・・・。

「うつわあゝ！ いっじわるうゝ！」

おおげさな笑い声を立てて、二人は教室から出て行った。

ポロツ・・・

楓の目から涙がこぼれた。

教室内は、しーんと静まり返っている。

みんな、見てみぬふりだ。自分が次の標的になるのが怖いから。
ターゲット

「グスツ・・・ウ・・・ヒック・・・」

ポタポタポタと、涙は頬をつたう。

「・・・だい・・・じょぶ・・・？」

一人で楓に声をかけてきた少女がいた。

(・・・た・・・しか・・・みくるちゃ・・・ん・・・だっけ・・・)

「グスツ・・・うん。大丈夫・・・だよ・・・」

無理矢理に涙を止め、笑顔を作った。

「あ・・・のね・・・？　うちに出来る事あったら、何でも言っ
て？」

「え・・・う・・・ん。ありがとう・・・」

今まで誰も自分に声をかけてきてくれる人はいなかった。

沙絵の、あの暴言をのぞいては。

それなのに、いきなり声をかけてきてくれる人がいた。

さらに、協力したいと言いだした。

楓は・・・幸せだ。

キンコンカンコン・・・

「あ・・・じゃあね？」

「うん。ばいばい・・・ありがとう」

涙は止まっていた。

目にはれぼつたいし、鼻もつまっているけれど。

味方が、出来た。

楓は・・・幸せなんだ。

- - - 翌日 - - -
- - -

ガラガラ・・・

教室のドアを開けて、楓が中に入ると・・・。

「あ、楓えい、おはよう」

甘ったるい声を出して、わざとらしく沙絵が近寄ってきた。

「え？ お・・・おは・・・よう・・・」

「今日も、学校頑張ろうねえ？」

「え・・・？ う・・・ん」

「じゃねっ」

「・・・ばいばい・・・???」

何かなんだか分からなかったが、自分の机に近寄った。

ああ。分かった。ナルホドね。

落書きだった。マジックかなあ？

『キモイ』

『ガッコ来んな!』

『クライんだよ！ お前が来ると！』

『穢れる。マジ消えて？』

『クサイ』

『帰れ！』

こう言った言葉の羅列だった。

筆跡をごまかす為か、ワザと汚く書いてある。

あるいは、書き殴ってあるといったほうが正しい。

どうしよっか……。

涙は、出なかった。

持ち前のマイペースで考えて、とりあえず、荷物を降ろすことにした。

カバンの中の教科書類を出して、机の中に入れる。

ガサツ……バサツ！

「ん……？」

机の中に入っていたのは、大量のごみだった。

というか、紙くずだった。

くしゃくしゃにされたそれを開いてみると、学校に置いてあったノ

ートが、破られたものだった。

楓の、スケッチノート。

楓が描いた絵の上に、『へたくそなんだよ、このブス！』

書き殴ってあった。

いくつかを開いていくと、今まで自分が描いてきた絵がくしゃくしゃに丸められていた。

白紙だったページも破られて、メッセージが書いてあった。

『ブス』

『絵ばっか描いてんじゃねえよ！』

『この下手くそ』

『顔だけじゃなくて絵もキモイ！』

『消えろ！』

『冗談は顔だけにして』

『なにこの絵』

というような、暴言。

すべてを机から出して、ゴミ箱にガサツと捨てた。

開いたスペースに教科書を入れて、戻ってくる。

カバンをロッカーに入れ、さてどうしようか？

マジックを消すのは一苦労だろう。

いっそ、職員室に行つて、落書き消しを借りてこようか・・・？

職員室に行つて、薬品を借りて戻ってくると、教室内から怒鳴り声が聞こえた。

なんだろうと思つて扉を開けた。

ガラッ・・・

「あんた、卑怯なんだよ！！ 言いたい事あったら、はつきり言え
ば？！」

「はあ？！ だからうちらじゃないって何度言えばわかるんだよ、
バカ！！」

「あんたたちしかいないでしょ？！ 他に誰がいるって言うの！！」
「うちらばっか、疑うんじゃないよ！！ 他にも誰かいんだろ！！」

開けた瞬間に、耳が痛くなるような、金切り声。

言い争っているのは、みくると沙絵達だった。

しばらく聞いていると・・・

（楓の事かなあ・・・）

みくろが楓をかばっているらしかった。

「・・・みくろちゃ・・・ん？」

「・・・楓・・・・・・・・」

「もういいよ？ だって、沙絵ちゃんもやってないって言ってるし・
・・・」

「だって！ どう考えたっておかしいでしょ？！」

「ふう。・・・おわったあ・・・」
「うん。きれいになってよかったあ」
「手伝ってくれて、ありがとね？」
「お礼なんていらないうてば！ 友達だったら当然でしょ？」
「楓と・・・友達になってくれるの・・・？」
「え？ もう友達だよ？ イヤ？」
「え？ 全然！ ありがとう！ あたしたち友達だよね！」
「そう。親友だよお？」
「・・・うん。ありがとお」
「じゃ、ほら？ もう授業始まるよ？？」
「そうだね。ありがと」

その日は、それ以上のいじめはなかった。

・・・『楓』に対しては・・・

7 過去の善行（後書き）

どうでしょう？

次回は、『8 過去の罪』です。

そろそろ、この物語も真ん中です。

連載としては短めの構成ですが、そこは新人なんで・・・

勘弁してください・・・m（――）m

では、次回もお楽しみに！

8 過去の罪（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません！
どうぞ、続きをお楽しみください。

8 過去の罪

「で？ 何か用なわけ？？」

誰もいない、教室の片隅で、みくるは眉をひそめつつ言った。

「用？ 用はね、うちの邪魔すんの、やめてくんないって話だよ！」

魅華ともう一人の仲間の千鶴ちずと共に立っていた沙絵が言い放った。

「邪魔・・・か。うちが、いつあんたたちの邪魔したんだよ？」

「はあ？ 分かってないわけ？ 楓の事だよ！ 味方につかないでくれる？ あいつの」

「何言ってるの？ 分かってないのはそっちだよ。なんで友達の方しちやいけないわけ？」

「今までなんも言わなかったくせに、いきなりいい子ぶってんじゃねえよ！！」

「今まで自分の間違いに気づかなかったただだよ」

「間違い！？ 間違ってるのはあいつだろ！！ 楓だよ！！」

「何で楓が間違ってるの？ あんたらが勝手に言ってるだけじゃん」

みくるは比較的冷静であるが、沙絵とその仲間はもう理性が飛んでいる。

喚き散らしつつ、意見を言うてくるのでワケが分からなかったが、要約するところというらしい。

『楓がいじめられるような性格をしているのが悪い。』

こちらは楓にそういう性格直せよと教えてあげているだけ。

この頃せつかく楓が反省してきたんだから、お前は口を出すな』

「いいかげんにしてよ！！ そんなの、いじめの理由を正当化してるだけじゃん！」

「いじめじゃないつつてんだろ！ とにかく、これ以上邪魔した

ガララララ・・・

朝、みくるは教室の扉を開けた。
目に憎しみをたたえて。

生徒玄関で下駄箱を開けたみくるは愕然とした。

ガサツ、バサバサツ・・・!

音を立てて、ゴミ箱の中身をそのまま入れたかのような大量のごみが落ちてきた。

「っっ・・・! やられた・・・!」

ゴミ箱を足元に持つてきて、下駄箱の中身をそこに移した。

「はぁ・・・。こんなことしかできねえのかよ!」

いつになく荒っぽい口調で、乱暴に靴を下駄箱に入れて、上履きに足を入れた。

「っ・・・痛っ・・・!」

上履きの中に、画鋲が入っていた。

手が込んだ嫌がらせだった。

上履きの中敷きを取って、底に画鋲をいれ、上からまた中敷きをかぶせる。

見ただけでは、靴底から少し金色のとげのようなものが突き出ているだけ。

一目見ただけではわからないようになっていた。

靴から画鋲を取り出して、だまって教室に向かった。

何気なく沙絵たち三人に目を向ける。

こちらの反応をうかがっているような目つきだった。

みくるはあえて何にも言わずに、まっすぐに自分の席に向かった。
机には何の変哲もない。

（・・・楓には気づかれずにうちを遠ざけたいって事か？）

それならそれで都合がいい。

楓に余計な心配をさせずに済むだろう。

一人で戦ってみせる。

うちは独りじゃない。

いざとなったら、楓もいるし。

それからは、毎日毎日だった。

ゴミ箱の中身を下駄箱に。

下駄箱の中身をゴミ箱に。

ゴミ箱の中身を机に。

机の中身をゴミ箱に。

落書きとかさ、目立つ嫌モンがらせがないのは、楓に気づかれない
為？

『それなら受けて立ってやる！』

強がったのは、最初の一週間だけだった。

だって、ウチはもともと、普通の女の子だった。

例え話をしようか。

例えばさ、

提出物があるとするじゃん？

そうするとさ、

1、出さない

2、きちんと出す

3、出す。けど、真面目にはやらなくって出す

答え、写すとか？

『2』バンの子のさ、プリント。写すとかさあ。

うちは、『3』だったわけ。もともとはね？

例えばさ、

イジメがあるとすんじゃん？

そうするとさ、

1、いじめる

2、いじめられる

3、黙ってみている

ううん。見てもいないよ。

知ってはいる。だけど、何も、しない。みたいな？

そうだね、俗に言う、『見てみぬふり』とかってやつ？

やっぱさあ、うちは、『3』バンだったわけ。

『1』もイヤ。『2』もイヤ。

なら『3』しかねえじゃん？ みたいなさあ・・・。

今はね、『4』だよ。てか、『4』になりたいと思ってる。
実際は『2』に近いけどね？

4、『2』の味方になってあげる

とかって、カツコよくない？

でも、そんな甘いもんじゃないって知った。
格好イイってだけで、救えるモンじゃない。

だってさ。『1』はまだいいんだ。もうホラ、諦めついてるから。
問題はさ、『3』だよ。

哀れみを込めた眼で、チラツと見てきてさ。
ヒソヒソヒソツ・・・って？

そんな眼するんだったら、助けてよ。って。

ゴメン。うちが悪かった。

格好だけで行動した、軽はずみなうちが悪かったから、
未来と楓いづみを助けて？

って言いたくなる。助けを求めたくなるけど・・・。

誰も助けてはくれないんだ。って、そう思う。この頃は。

まあ、とにかくさ、そういう『普通』の女の子がさ、
いじめられて、それに耐え切れなくて。

守ろうとしてた『2』の子は何も知らずに笑ってて。

うちは、身代わりになってたわけ。

もう精神がボロボロだった。

でも耐えたよ、耐えた方だと思う。

一ヶ月ぐらいかな？

「沙絵……もう、やめて……くれない？」

放課後、三人の前で弱音を吐いた。

みくるは負けた。

そこからはもうトントンと話が進んだ。

『もう楓には話しかけるな』

『もう楓の味方はするな』

『もう沙絵達の邪魔はするな』

そんな条件。

全部呑んだ。

最低だと思う。思った。自分でも。

でも、その時はそんな事考える余裕なくって。
今考えると、最低。

1、いじめる よりも。

3、黙ってみている よりも。

5、味方ぶって、見捨てる

最低。

「じゃ、もうあんたへの嫌がらせはやめてあげるう」
勝ち誇った瞳^めで、甘ったるい声で沙絵は言った。

「・・・あり・・・がと・・・う」
言うしかなかった。

「じゃあ、約束どおり、楓には、もう干渉しないでねえ」？
同じような勝ち誇った瞳で、魅華も言った。

「あんた・・・クスクスッ・・・最低だねえ」？ 結局偽善者ぶつ
てたってことでしょう？」

千鶴に言われた時は、『こつするしかないんだもん』と思った。
でも、やっぱりうちは・・・最低だ・・・

「はゝあ……。フツ。楓がどんな反応するかなあ？」

沙絵が唇を上げながら、楽しむように言った。

「楽しみだねえ、沙絵？」

「うん！」

「じゃあ、用事は済んだわけでしょう？ さっさと帰ったら？」
沙絵がうちの頭を軽く小突きながら意地悪く言った。

「バイバイ。『偽善者』、さん」

「……………バ……………イバ……………イ……………」
「また明日ねえ？」

ガラガラガラ……………ピシャツ！

教室からみくるがいなくなると、三人は不敵に笑った。

「んじゃあゝ！ 邪魔者も排除した事だしゝ！」

「やりますかあゝ！」

「ホントにやるのおゝ？」

「あつたりまえじゃあゝん！！ せつかく心優しき未来みくるさんが諦めてくれたんだしいゝ？」

「バレたら怒られちゃうよ？」

「誰も、あたし達がやったなんて言わないって！」

「だって分かるじゃん！ クラスでこんな事やる人、ウチらしか居ないじゃん！」

「だからって、チクるやつなんていないって！」

「でもさあゝ？・・・」

「る・・・っさいなあ！！ グジグジ言っただったら抜けなよ！ あたし一人でやるから！」

「ええ？！ やるよやるよ！！！」

魅華は千鶴の腕を引っ張り、沙絵の後に続いて楓の机に行った。

「あいつ、全部置き勉してるからなあ」

ガサガサ、と、楓の机の中をあさっていた沙絵はふと手を止めた。

「お、ホラ。筆箱があつたよ」

「それでいいじゃん。早くしよおよ」

「あせるなあせるなっ」

その筆箱を手に、黒板の前に集まった三人は手に手にチョークを持った。

お決まりの、『落書き』だった。

『馬鹿』

『死ね』

おかしいなあ……。いつもみくるちゃんだったら、楓が来たらすぐにオハヨウって言うて近づいてきてくれるのに……………。

楓は自分からみくるの席に近づくと

「み……くるちゃん！ おはよう……！」
と元気に挨拶をした。

……が、肝心のみくるからは返事が返ってこない。

「……お……はよう、みくるちゃん」

みくるはこわばった顔つきで、目だけで楓を見た。

「……おはよう……」

無愛想に、それだけが返ってきた。

（おかしいなあ……。お腹でも痛いのかなあ）

考えながら自分の席につき、バックをロッカーに入れてきた。
先生が来るまでの間、絵でも描こうかと机の中に手を入れた。

(来た……。)

楓が。

いつものうちだったら、真っ先にオハヨウ！って言うんだけど……。

目だけで何気なく沙絵達を見ると、

『話しかけんじゃねえぞ!!』

という雰囲気伝わってくる。

(……もうあんな目にあうのはイヤだ……。)
だから、声をかけない。

すると、楓の方から机に寄ってきて、

「み……くるちゃん！ おはよ……!」

と言う。

『もう、楓と話さない事』

という条件が頭をよぎる。

なんとも言えず黙っていると、楓はもう一度挨拶をしてきた。

「……………おはよ……………」

出来るだけ無愛想になるように、目だけを動かして、声を低くして呟いた。

すると、楓はそれで満足したのだろうか、自分の席に戻っていった。

無い．．．．。

昨日まではあった、楓の机の中に確かにあった。

筆箱が．．．．．無い。

沙絵ちゃん達がやったのかなあ？

この頃は嫌がらせが無くて、安心してたのに．．．．。

ああ、でもそうだ、楓はもう独りじゃない。

みくるちゃんが居るから大丈夫だ。

（何？ 楓、何でこっち来るの？）

カタンと席を立て、楓はまっすぐみくるの机に向かってきた。

みくるは慌ててうつむいた。

机の上の、彫刻刀で彫られた落書きを見る事に熱中した。

「あの・・・みくるちゃん・・・」

（・・・何？ 楓としゃべったら、またうちが標的ターゲットにされちゃうんだよ？）

ウチは何にも言えなかった。

「・・・筆箱が・・・なくなっちゃって・・・」

「・・・」

「一緒に探してくれないかなあ？ よかつたら・・・」

答えてあげたい。でも、斜め後ろから沙絵達三人の視線を感じる。

『しゃべるな。味方するな。独りにしろ、そいつを』

という、痛い、悲しい、怖い視線を。

楓、ゴメンネ。

でもさ、楓、そんなにまでだったの？

そんなにまでうちを頼っていたの？

そんなにまでうちを信じていたの？

楓。あんた馬鹿じゃないの？

人間なんて、いくらでも裏切るんだよ？

人間なんて、いくらでも裏切られるんだよ？

そう思うと、逆にこの、愚直なまでに人を信頼する女の子が憎たらしくなってきた。

「・・・みくる・・・ちゃん？」

「もう！うるっさいなあ！！」

「え・・・？」

「もう、うちに話しかけないでくれるかなあ？」

「ええ？ 楓、なにか気になる事しちゃったのかな？！」

「・・・・・・・・・・」

「お願い、直すから、悪い所あったら、直すからっ・・・」

自分が悪いと思ってるの？

悪いのは100%うちひやくパー。

そんなに必死になられると、今度はそこが憎たらしくなってくる。
やっぱりあんたは、バカだね。

「・・・自分で考えてみればっ・・・!!」

楓に悪い所なんて無いけど、口が勝手にそう言ってしまった。
後ろで沙絵達が笑っているのが分かる。

もうこの教室から出て行きたくって、楓を押しつけて、扉に向かった。

「そんな事言われたって・・・・・・・・」

楓は小声でつぶやいた。

つぶやきながら、視界がどんどんぼやけていくのを感じた。

「わかんないよ・・・」

ポロポロと涙がこぼれ落ちた。

どんないじめを受けるよりつらい。

友達だと思ってたのに、裏切られた・・・のかな・・・・・・・・??
とうとう床に座り込んでしまった。

「わかんないよ、みくるちゃん!!--!!」

嗚咽と共に、悲鳴に近い声が自分ののどから出るのを聞いた。

あたしは、やっぱり最低だ。

罵^{のの}つてもいい。

口汚く、罵られても、いい。

「最低だよ！ あんた」

と、軽蔑されても、いい。

あたしは、それだけの事をしたんだ。

ゴメンネ、楓・・・・・・・・。

9 流歌Ⅱ 楓

美術室。

楓は、床にぺたんと座っているみくるの前に立っていた。

「結局最後までみくるは助けなかったし……」

いきなり楓が口を開いた。失望したような口調だった。

「楓は……エスカレートしたイジメに耐え切れなくて……」

みくるは怯えきつた表情で楓を見ていた。

「その命を絶った……。。。。。。知ってる？ 首をつるって……
・苦しいんだよ」

楓の顔が本当に苦しそうにゆがんだ時、みくるは目に浮かべた涙を一粒落とした。

「でも……」

ふつ、とふいに楓の表情がやわらいだ。

「イジメの苦しさよりはましだったって事だよ……？」

「今さらこんな事言っても手遅れだけど……あの時味方が一人で
もいれば……」

また楓の顔が一瞬ゆがんだ。

と、思うと眼から一筋の涙が流れ落ちた。

「楓は今、みくると一緒に美術部^部に居たかもしれないのに……」

グスツ、と一瞬泣いた後、楓は服の袖で涙を拭いた。

「今度はあたしが、みくるに仕返し・・・」
一度手を後ろに隠すと、また出した。
そしてその手には、柄はこげ茶、刃は銀色。
そして・・・先の方は鮮やかで、艶やかな・・・赤。
血のついたナイフを握っていた。

「楓・・・・・・・・ごめんね・・・・・・・・ごめんね・・・・・・・・」
みくるは泣きながら、後ずさりながら、必死で謝った。

「みくるに復讐するのは、無理かもしれないけど・・・・・・・・」
あたし、頑張ってみるね？」

「ねえ・・・許してよ・・・・・・・・。お願い楓、ごめんね・・・・・・・・」
「

ナイフを手にとって近づいてくる楓に対して、みくるは恐怖も抱いていた。

だが、それよりも、楓に対してのすまなさでいっぱいだった。
恐怖と、すまなさで、みくるは謝った。

だが・・・

「クス・・・・・・・・無理・・・・・・・・」

楓は微笑を浮かべながら、みくるに向かってすごい速さで近づいてきた。

「お願いお願い・・・・・・・・！ごめんね・・・・・・・・！！！」

「クス・・・・・・・・クスクスクス」

とうとう目の前に来た楓は、ナイフを振りかざした。

「フフツ・・・・・・・・キャハハハハハハ！！！！」

「いやあああああああああ！！！！！！！」

世界が真つ暗になる直前、
ナイフが自分に向かって来るのを、
みくるは見た。

9 流歌Ⅱ楓（後書き）

と、いう事です・・・。

まあ、ありきたりな終わり方ですよねえ（笑）

流歌はどーなってしまうのか？！

みくるの運命は？！

と言うわけで、次回、『10 うちが・・・？』。

の答えが分かります。

そろそろ終わりに近づいてきました。

引き続きお楽しみくださいw

10 うちが・・・？

「つく・・・」

左腕にチクチクと痛みを感じ、
みくるは目をゆっくりと開けた。
心は落ち着いていた。

何が・・・あつたっけ・・・？

視線を腕に向け、深い切り傷を見た時、
みくるは思い出した。
「楓・・・！」

そう。流歌が楓にのっけられて・・・
えっと・・・楓が襲ってきて・・・
どうしたっけ？

ふと顔を上げた。

目の前は、血で溢れていた。

血だまりの真ん中には、うつぶせに倒れた、流歌。

「流・・・歌・・・?! 何? 何!」

慌てて立ち上がろうとしたその時、腕に抵抗を感じた。
右腕を見ると・・・

1脚の、イス。

血だらけの・・・イス。

血だらけ?

どうして?

何で、血だらけ?

ああ。え?

「うちが・・・・・・流歌をつ・・・・・・?」
顔が、さっ、と蒼くなつた。

みくる^{うち}が? 流歌を?

え? なんで?

何のために?

誰のために・・・?

楓、だ。

楓にのつとられた、流、歌を・・・。
自分が、

殺した。

考えがそこにたどり着くまで、しばらくかかった。

「い・・・やああああ！！！！」

まるで、汚いもののようにイスを突き放し、
みくるは美術室を飛び出し、学校を飛び出し、
校庭を突っ切って、どこまでも、走っていった。

逃げなきゃ。

どこへ？ どこへでもいい。

逃げなきゃ。

なんで？ 来るから。

来るから。

誰が？ 誰って・・・

あれ？ 誰が？

楓は、いない。

もういない。

ていうことは・・・

「これで・・・よかったのかも・・・」

ふと足を止め、息を整えた。

「うちが流歌を殺した？ でも、流歌の中の楓も一緒に逝ったはず・
・・・」

「ごめんね、流歌・・・」

自首、しよう。

流歌を殺した、殺したんだから。

警察署に向かってゆっくりと歩いた。

が。

・・・ひたっ・・・

「・・・え・・・？」

ぴた、と足を止めると、

・・・ひたっ・・・

ずれる。足音が、うちのじやない物あしおとが。

ひとつずれて、聞こえる・・・。

「足音が・・・ひとつ・・・余計に・・・？」

「きゃあああああああああああ！！！」

走りながら、考えた。

じゃあ、何のために？

何のために、流歌を殺したっていうの？

ずっと走った。

息が切れても走った。

止まったら、殺される。

だめだ。

止まったらダメ。

ずっと走った。

楓は、ずっとついてくる。

「ごぼっ、ごぼっ！」

もう何キロ走っただろうか？
ヒュー・・・ヒュー・・・
喉がなっている。

「がっ・・・ごぼっ！ げぼげぼっ・・・！」

もう・・・。苦し・・・い・・・

「げぼっ！」

せきをした瞬間に、血が喉から飛び出た。

え・・・っ？

反射的に口に手をやると、赤い液体がべっとりついた。

でも、

止まらない。止まったら、今度こそ殺される。

「げぼっ・・・がっ・・・げぼげぼっ・・・」

血の感覚が喉を伝う。

体が・・・限界だっ・・・！

「あっ・・・！」

足がもつれた。そして、転んだ。

「くあつ・・・！」

殺される・・・。

けど・・・。

もう、いいか・・・。

頑張った。十分頑張ったから・・・。

もう、大丈夫。後悔はない。

このまま、眠ろう。

ぱたぱたぱた、と足音がした。

だが、かまうものか。

いいよ？ もう、十分だよ。

好きにしてください。

うち・・・はっ・・・もう・・・眠る・・・からっ・・・

ゆっくりと、眼を閉じた。

ヒュー・・・ヒュー・・・

という、苦しそうな音を聞きながら、眠りに落ちた。

『おやすみ』

10 うちが・・・？（後書き）

とうとう逃げるのをあきらめてしまったみくる。

楓はみくるをどうするのか？

次回は『11 北条楓 死亡推定時刻 深夜12時頃』。

過去の話をもう一度詳しくかくつもりです！

引き続き、お楽しみください

11 北条楓 死亡推定時刻 深夜12時頃

「……みなさんに……悲しいお知らせを、しなくてはなりません……」

朝一番に教室に入ってきて、先生が言ったこの言葉。

ざわ……

半分の好奇心と、半分の不安で、クラスは一瞬ざわついた。だが、また元に戻った。

しん、とした教室で、先生は口を開いた。

が、すぐに閉じ、同時に眼も閉じた。

何をしているんだろう？

泣いていた。すすりなきが聞こえた。

「ぐすつ……」

「くす……ひく……」

五分ほどそうしていただろうか？

始めのうちは、みんな何が起きたか分からず、啞然としていた。

しかし、その空気に耐え切れなくなった人間が、委員長に催促し始

めた。

「え．．．と．．．。先生？　何があつたのか、みんなに話してくれませんか？」

まごついていた女委員長だったが、立ち上がって、先生の話促した。

「ああ．．．ごめんなさい．．．ね。説明．．．しなく．．．ちや、ダメよね．．．」

途切れ途切れに、すすり泣きながら、先生は言つて、それから涙を袖で拭いて、顔を上げた。

「実は．．．楓ちゃん．．．。北条楓さんが、今朝、亡くなられました」

．．．．．

沈黙。誰も何もいえなかった。

みくるだつて例外じゃない。

何？　何？　楓．．．が。死んだ．．．？

先生の言葉の意味を飲み込むのに、時間がかかった。

口火を切つたのは委員長。

「先生？！　それってどういう事！？」

普段は教師に対して常に敬語の彼女も、この時はそんなものは忘れていた気がする。

委員長に続いて、

『死んだ？．．．って何？』『いつ？』『何で？』

そんな会話が、誰に言つともなく、生徒達の間でさざなみのように広がった。

「先生！　ちゃんと詳しく説明してよ！」

「ええ……。」

先生がすすり泣きつつ説明してくれた。
途切れ途切れで細かい事はよく分からなかったが、とりあえずだいたい
の状況は分かった。

北条楓

月 日 7時頃。

なかなか楓が起きてこないで、遅刻しないかと心配になり、母親
が二階へ。

楓の部屋をノックするが、返事がない。

ノブを回すが、鍵が掛けられており、入れなかった。

父親がやってきて、二人でドアをこじ開ける。

天井の照明器具に縄をかけ、楓は首吊り自殺。

驚いた両親があわてて楓を下ろすが、既に冷たくなっていた。

「……と、……言うわけです……。」

重く沈んだ声で、先生は説明を終えた。

誰も何も言わないが、楓の自殺は明らかに沙絵たちのイジメが原因
だ。

その一日は、教室中が喪に服しているように静かだった。

沙絵たち三人も、責任を感じているのか、どのクラスメートよりも
静かだった。

楓の自殺から、3週間。

授業参観があった。

科目は、道徳。

驚いた事に、教室の後ろに並ぶ父母の中には、楓の両親が立っていた。

『起立、礼』

授業が始まると先生は、

「今日は、みんなに話があります」と言った。

「何人が気づいている人もいるかもしれないけど。後ろを見てください。楓さんの、ご両親が見えています」

先生の言葉でみんなは後ろを振り返り、そしてまた前を向いた。

「実は、先日、楓さんの部屋から遺書が発見されたそうです」

そうですよね、とでも言うように、先生は楓の両親をつかがい見た。両親はうなずき、母親がハンドバックから一枚の封筒を取り出した。どこにでもあるような、キラが書かれた、かわいい封筒。

何も聞いていなければ、楓が友達に向けて、軽い気持ちで書いた、そういう手紙にも見えただろう。

それが遺書だった。

「先生はこの前、」

口を開いた加賀爪 かがつめ 夢羽先生を、全員が振り返った。

「その遺書を見せていただきました」

と、ここで加賀爪先生はうつむいた。泣いているのか、と誰もが思ったが、彼女は涙をこらえ、顔を上げた。

「今日は、みんなにその遺書の内容を知って欲しくて、持ってきて頂きました」

と言った声は、しかし震えていた。

「楓さんのお母さんに読んでいただきたいと思います」

の一言で、教壇上の人物は交代した。

「え・・・と、会った事がある人もいると思いますが、初めまして、楓の母です」

と自己紹介が始まった。

そして、いよいよ、封筒が開けられ、中の手紙が読まれ始めた・・・
「みなさんへ

楓は、いろいろ辛かったけど、頑張って耐えました。

何をされても耐えました。

死んだら楽になると考えましたが、

死んだらすべて終わってしまうと思いました。

ずっと耐えていたら、ある日味方してくれる人が現れました。

友達が出来て、とても嬉しかった、ありがとね。

でも、もう耐え切れません。

疲れました。

何が終わっても、別に大丈夫だと思うようになりました。

友達も出来たし、短かったけど、その日々はとても楽しかったよ。

もう、夜も遅いから、そろそろ逝きます。

生きれなくてごめんなさい。でも、怖くないから。大丈夫です。

お父さん、お母さん、あと、楓の大切な友達、ごめんなさい。

さようなら。楓の心配はしないでね。幸せになれるから、大丈夫だよ。

さようなら 楓より

」

後半は、楓の両親はおろか、クラスメートの何人かも泣き始めた。いじめを、見過ごすべきじゃなかったと。

沙絵達三人も、うつむいていた。

そして、一筋の涙が頬を伝っていた。

重い雰囲気の中、授業終了を告げるチャイムがなった。

「先生！ 楓のお母さん！」

「あら・・・？ 沙絵さん、魅華さん、それに千鶴さんも・・・」

先生が言い終わらないうちに、ほおを涙でぬらした三人は、

『ごめんなさい！！』

声をそろえて頭を下げた。

「・・・え・・・？」

「楓を自殺させたの、うちらなんです！」

「うちらが楓をいじめてたから・・・！」

「ごめんなさい！ まさか・・・死んじゃうなんて思わな・・・く」

『ごめんなさい！！』

もう一度頭を下げたかと思うと、沙絵はそのまま床に座り込んでしまった。

「うわああー！！」

と、声を上げて泣き始めたのだ。

これには周りのクラスメートも、先生も、楓の両親も、三人の両親も。

とにかくみんながびつくりした。

沙絵につられて、周りのクラスメート達も泣き始めた。

『ごめんなさい!』

『う……ちらも、見て……みぬ……ふりっ……して……つた!』

『うちらっ、がちゃんと……注意して……ればっ!』

『ホント、に……ごめっ……なさ……』

『自分が……いじ……められっ、るのが……やだ……
・た……からっ……!』

びつくりしたのは楓の母である。

うちの子の為に、こんなに大勢が涙を流している。

うすうすわかっていた。

いじめられている事は。

だが、相談を聞いたら、楓を学校に行かせることが難しくなるのは。

不登校になってしまうのでは。という恐怖が頭をよぎり、今まで何も言わないでいた。

しかし、遅かった。楓は、逝ってしまった。自分が事情を聞く前に、しかし、すべてをこの子達が教えてくれた。

こんなに、素直に謝ってくれることが、嬉しくもあり、また悲しくもあった。

自分が、ちゃんと事情を聞き、学校に言っていれば。

こんなに素直な子達なんだ。楓が追い詰められていた事を知れば、すぐに止めてくれたかもしれないのに。

自分は馬鹿だ。『甘やかす』事と『受け止めてあげる』事をカン違いしていた。

「ありがとう。みんな、事情を教えてくれて、ありがとね?」
大半が床に座り込んでしまった生徒達。

小さな体を抱きしめて、楓の母は一緒に泣いた。
その中には、みくるの姿もあった。

「みくるちゃん」

呼び止められて振り返った。

「あ……楓のお母さん？」

「ええ。実は、お話があるの」

「何ですか？」

「みんなの前では読まなかったけど、あの手紙には、本当は続きがあったの」

「え……？」

「これ……。あなたが読むべきだわ」

と手渡された、先ほどの封筒。

中身を見ると、一枚だと思っていた便箋は二枚あった。

『みくるちゃんに渡してください』

そうメモがされた便箋を開くと、

恐縮しているような、小さくて整った字が書いてあった。

『みくるちゃんへ』

楓の味方になってくれて、ありがとう。

みくるちゃんに謝らなきゃいけないことがある。

ひとつは、せっかく味方してくれたのに、楓がこの後死ぬ事。

もうひとつは、この前言ってたこと。

楓、何か気になる事しちゃったんだよね？

悪い所あったら直そうと思ったんだけど。

正直に言うと、楓、みくるちゃんに何をしたのか覚えてないんだ。

最低だよな？ 友達傷つけといて、覚えてないなんて。せつかく友達になってくれたのに・・・。

だから、謝らないまま逝くことになっちゃったけど・・・それだけが心残り。

怒ってもいいよ。楓はその怒る姿を見て、生まれ変わったら、人を傷つけない人間になるから。

その時に、またみくるちゃんに会えたらいいな。

短い間だったけど。ありがとう。

そして本当にゴメンネ？ また会えたらいいね。

さようなら

楓より

」

本当に、馬鹿なんだから、楓は。

最後まで、死ぬ直前まで、自分が悪いと思い込んでたんだ・・・
そう考えると、自然に涙があふれ出て、声をあげて泣いた。

「ごめんなさい！ 違う！ 違うんです！ うちはこんなに立派な人間じゃない！」

「え？ どうして？」

「むしろ、最低なんです！ イヤだイヤだあゝ！ 楓、戻ってきてよあゝ！！！」

「な・・・え？ みくるちゃん？？ ちょっと・・・落ち着いて・・・！！！」

その後、楓のお母さんになだめられて、うちはすべての事情を話し

た。

彼女から帰ってきたのは、意外な言葉だった。

「別に・・・大丈夫よ？」

「・・・え・・・？」

「きっと楓はうらんでなんかいないわ。そりゃちょっとはびっくりしたかもしれないけど」

「なんですか?!　　うちは楓を裏切ったの!!」

「でも、きっと大丈夫。楓は、味方が出来ただけで、きっと嬉しかったと思うわ」

「・・・」

「裏切られた悲しみは大きいかもしれない。でも、助けられた喜びのほうがずっと大きいはずよ？」

ちがう?　と問われ、みくるには返す言葉がなかった。

そんな風に前向きには捕らえられない。

だが、そう考えると、とても心が落ち着く。

どっちにしても、楓が哀れでならない。

「そうだわ。今から、家に来ない？」

「え?　今からですか？」

「そう。どっちにしろ、その顔じゃ、お家の人びつくりするわよ？」

クスクスと笑いながら、彼女はハンドバックに遺書をしまうと共に、折りたたみの鏡を貸してくれた。

覗き込むと、目が真っ赤ではれぼったく、ほほには涙の跡がばっちりといった顔が映っていた。

「うちに来て、顔を洗って、温かい紅茶でもどう？」

「いや・・・でも、いきなり押しかけたら悪いし・・・」

「平気よ。誘っておいて、押しかけただなんて思わないわ。それに、楓に線香もあげて欲しいわ。ぜひ！」

その後も、『いらつしゃい』『イヤ、でも・・・』という問答が続いた。
折れたのはみくるであつた。

楓の家には、御香の香りが立ち込めていた。

「紅茶を入れてくるから、楓に線香をあげてあげて？」

「・・・はい・・・」

遺影の中の楓は、喜びに満ちた顔つきだつた。

くすん・・・

鼻をすすりながら、線香をあげた。

運んできてくれた紅茶を飲むと、気持ちがいくらか落ち着いた。

「コレ食べてみて？ 私が焼いたクッキーなの」

と差し出されたクッキーをひとつつまんで、口に入れた。

サク・・・と言う音と共に、香ばしい香りが口いっぱいに広がった。

そして後には、ほんのりとした甘みが残る。

「・・・とってもおいしいです・・・」

「そお？ ありがとう。そのクッキーはね、楓の好物だつたの」

「そうだつたんですか・・・」

楓と同じものを食べている。

それだけで、なんだか楓の友達だと胸をはれる気がした。

そのあと、楓の母と、楓の話をし、ちょっとだけ泣いた。

みくるが玄関を出たのは、もうずいぶん日が沈む頃だった。

「夕焼けが……きれい」

明日は、晴れるね。

・・・ひた・・・

「？」

一瞬振り向いたみくるだったが、誰もいないことに安心したのか。再び前を向き、歩き出した。

11 北条楓 死亡推定時刻 深夜12時頃（後書き）

どうでしょう？

これで、完全に過去編はおわりだと思います。

次回は「12 ここは・・・？」。

次回がほぼ最終話です。

予定ではもう一話ありますが、話の流れは次回でおわりです！
あとほんのちよつと、お付き合いください！

12 こころは・・・？

楓・・・楓・・・

ご・・・めんねっ・・・

本当に・・・ごめんねっ・・・

つう・・・と、頬に暖かいものが流れた。
と、その涙は、あごに届くまもなく、ぐい、と拭われた。

誰？

その疑問と共に、自分が、横になっている感覚、瞼を閉じている感覚。
覚。

よみがえった。

まって・・・うちは・・・どうなった？

楓？ そこにいるのは楓？

追いかけて、転んで・・・。

楓だとしたら、目を開けてはいけない気がする。
目をつぶったまま、様子を全身でうかがっていた。

殺意は、感じられなかった。

じゃあ、誰？

うつすらと、目を開けた。

白い天井。

知らない女。^{ひと}

それにお母さん。

そして、白衣を着た、男の人。

「こ・・・こは・・・？」

出た声はかすれていて、まるで別人のようだった。

あんなに走ったんだもの、当たり前か。

喉が渴いている・・・。

「病院だよ」

と男の人は答えた。

じゃあ、あなたは医者なの。

そうだよ。

言ったきり、看護婦に指示を出して、なにやらちょっとした検査を始めた。

体温 心音 呼吸 などなど。

そして、それが終わると、

「何かあったら、ナースコールを」

と、病室から出て行った。

「うちは・・・どうなった？」

「みくるはね、道路に倒れている所を、通りかかった人が見つけてくれたのよ」

「そっか……。この女の人がそうなのかな？」

「ねえ……。この人は……。誰？」

失礼な言い方かと思ったけど、お礼を言わなきゃと思ったから聞いてみた。

「この方は……」

言ってもいいのかという風に、みくるの母は女の人を見た。

「私は、警察の後藤だ。後藤、律子」

「警察……？」

どうしてと言いかけて、やめた。

うちは、流歌を殺している。

それかもしれない……。

「ところで……。お母さん……」

と、律子が言いにくそうに顔をゆがめた。

「あの、みくるちゃんに事情を伺いたいんですが……」

事情……。？ やっぱり、流歌の事を……。

「あ……。ああ、ええ。分かりました。私は、席をはずした方が？」

「そっちの方が、警察としては、好都合ですが……」

「はい……。じゃあ……。30分ほどでもいいですか？」

「はい。それだけあれば十分です」

「では、30分したら戻ります」

出て行くとする母に、

「お母さん、うち……。喉が渴いたよ。たくさん走ったから……」

と、みくるは言った。

「じゃあ、戻ってくる時にお茶かなんか買ってくるね」

「……。ありがと……。う」

「さて……。じゃあ、単刀直入に言おう」

・・・来た・・・

「君は、流歌をどうした？」

元々、警察に自首するつもりだった。

かまわない、正直に言おう。

「殺した・・・」

「・・・なるほど・・・今の時点で、自供とする。犯人は君で確定だな」

言いながら律子は信じたくなかったと首を振った。

「はい・・・」

「なぜ？」

なぜ？ なぜ殺したかと言えば、楓のせいだが・・・

「言ったって、絶対に信じませんよ・・・」

「どうだろうね？ 場合によっては信じる」

「じゃ、聞いてください。とりあえず、最後まで」

「言って」

みくるは、楓の自殺の事、足音の事、流歌が乗り移られた事と共に、なぜ道路にいたのかまで話した。

「以上です。後は、あなた方のほうがよく知っている」

「なるほど・・・」

じつと考え込むそぶりを見せた律子は、そのうち顔を上げた。

「君は、病院に運び込まれてから、約半日眠っていた」

そんなに？

「その間、私は常にこの病院にいた。そして、この病室を度々訪ねてきた」

・・・何を言いたいのかまったくわからないが、とりあえずうなずいておく。

「なぜなら、君が流歌殺害事件の容疑者だったからだ」

「そして、その度に、君は『楓』と言っていた。また、『ごめんね』と」

「・・・はぁ・・・」

「『楓』というのがどういう意味か。その謎が、今解けたよ」

「・・・だからなんだと言うのだ？ この律子という女、さつきから言い方が遠まわしだ。」

「今度は、私の意見を聞いてくれるかな？」

ほんととは、こういう事は、話してはいけないんだけど。

と笑いながら、律子は話し始めた。

「いいかい？ これは、君が、楓に対する罪悪感、または、恐怖やそれに近いものによつて、幻覚を見ていた場合の話だ」

幻覚？ そんなはずない、現に、楓が襲ってきたじゃないか。

うちの手には傷が残っている。

「まず、足音の話だが、それは簡単だ。幻聴だ、と言う事にしておこう」

「そして、流歌の話。これは、理由はよくわからないが、すべて彼女の演技だと言う事にすればつじつまが合う」

「何のために？ 意味がないよ、そんなことしたって！！」

「コレは私の推測だが・・・流歌は、きっと、君が楓に悩まされている事に気づいたんだ。そして、それと共に、なぜかは知らないが、君が裏切った事で楓が死んだと気づいた」

「どういうことですか？！」

「落ち着いて・・・。つまり、そうだな、流歌は、楓の復讐をしようと考えた。と言うのはどう？ 流歌は、楓が死んだと言う事が許せなかった・・・きっと、陰の親友だったりしたんじゃないか？」

「流歌が？ 楓の親友？ でも、なんで陰の友達なの！？」

「君は、過去に、楓の味方をしたと言う事でいじめを受けたんだろう？ ならば、流歌も同じだよ。きっと、彼女は、自分がいじめられるのは嫌だったんだ。」

「そんなの・・・みんなと同じじゃない！」

「違うよ。正義感の強い彼女は、それでも、何もしないよりはと、陰で味方だった。とか？」

「・・・でも、楓はそんな事一言も言わなかった・・・」

「これも私の推測だが・・・楓は、みんなの前では何もしない流歌より、みんなの前でも自分にやさしく接してくれる君の方がよかつたんだよ。それで、君に流歌の事を言ったら、君も流歌と同じ方法を取るのではと、怖かったのかも・・・」

「分かりました・・・それで・・・？ 流歌が演技をしていたと言うのは・・・」

「まず、何らかの方法で、例えば、友達に頼むとか・・・。足音を君に聞かせる。そして、誰もいないよと言う。ドアを開けたのは流歌だろう？ 共犯者が君の視界に入らないようにぐらいは計算して開けるし・・・そして、乗り移られた振りをする」

「あとは・・・楓の振りをして・・・うちを刺す・・・？」

しかし律子は、首を振った。

「ところがね、 違うんだよ。君の話と、現場は」

「は！？ どういう事？！」

「まず、第一に、あの現場にナイフはおろか、刃物らしきものは置いてなかった」

驚きと、抗議の声を上げようと口を開いたみくるを、律子は制し、話し始めた。

「第二に、握っていたのは、ナイフではなく、筆だった」

「そんなんっ！」

「黙って！ そして、第三に・・・血ではない。絵の具だ」

「絵の具・・・？」

「君の絵に手を入れるためについていた、絵の具を、君は血と見間違えた」

「そんなっ！いくらなんでも、筆をナイフに、絵の具を血になんて・・・！」

「だが、現に、握っていたのは筆だった。そして、ついていたのは絵の具だ」

「でもっ！ だったら、流歌はウチに復讐なんかできやしない！！」

「それは、よく分からないけど・・・そんなに強い復讐のつもりじゃなかった。きっと。赤い絵の具で、君の顔や手足を、血まみれにする・・・とか、そんな事だろうな・・・」

「そんな、そんなっ！ じゃあ！」

「君は、落書きをしようとした流歌を、襲ってきた楓の幻覚と重ね合わせてしまった。そして、自分の身の危険だと思い、側にあったイスで、殴りつけた。そんなところじゃないのか？」

「うわああああああああああ・・・・・・」

みくるは、目に涙を浮かべ、自分の頭を抱え込み、弱々しくこえをあげた。

そして、ギッと、律子を睨みつけた。

「違う・・・！ 違う！ うちが、流歌を殺してなんかいない！

あれは流歌じゃない！！ うちが、そんな理由で、流歌を！ 流歌を殺すわけないんだああああああ！！」

耳をふさぎ、頭を横に振り、悲鳴に近い抗議の声を上げた。
すっ・・・

みくるの頭に、律子両手が伸びてきた。

そして、律子はそのまま優しく、みくるの両頬をはさんだ。

「分かっている・・・君の行為は、流歌への殺人じゃなくて、楓への正当防衛だったんだよね？」

耳元で優しく、さとすようにささやかれ、みくるは動きを止めた。

それと共に、みくるの目から大粒の涙が流れ落ちた。

「辛かったね・・・罪悪感で一杯だったんだよね・・・？ 大丈夫だよ。本物の楓はきつと、君を許しているよ。きつと許しているよ」

「う・・・うああ・・・っ・・・」

「・・・大丈夫だよ。もう大丈夫・・・」

優しく頭をなでる律子の手は、微かに震えていた。

この子はこの年で・・・とんでもない罪悪感を背負っていたんだ・・・。

いや。背負っているんだ・・・。

ずっと、ずっと背負ってきたにちがいない。

みくるの鳴咽が止まると、律子は、そつとみくるを抱きしめて、そして離れた。

「・・・落ち着いた？・・・」

「・・・はい・・・。取り乱してすみません・・・」

声は震えていたが、目は赤かったが、大丈夫だ。

この子は強い子だ・・・。

「ごめんね・・・言っておかなきゃ・・・。罪の事と、処分の事・・・」

「はい。大丈夫です。言ってください」

「・・・罪の事だが、殺人罪。だが、君は未成年だし、精神病と言う事はつきりすれば、処分はもつと軽くなるだろう。ちゃんと、流歌の罪を償って、立派な大人になってね？」

「大丈夫です！ きつと、きちんとした、胸をはれる大人になる！」
みくるはニツコリと笑ってうなづいた。

「よかった・・・」

ガララララ・・・

「すみません、30分たったんですけど・・・」
決まり悪そうな顔をして、みくるの母が廊下から顔を出した。

その後、三人でとりとめのない話をして、たくさん笑った。
2時間ほど話をして、律子は腰を上げた。

「じゃあ、そろそろ私はおいとまします・・・仕事もありますし・・・」

「そうですか、婦人警官というのも大変なお仕事ですね・・・」
「まあ、自ら志して選んだ道ですから・・・」

「律子さん、また来て下さいね!」

「ははは、また、暇なときにでも寄るよ。じゃあね」

「さよならあ」

「色々ありがとうございました」

その後もみくるの母は病室に残り、面会終了時間まで居座り続けた。
何の話をしたかといえは、やはりくだらない話であったが。

あえて、流歌の事には触れないでおいでくれた母の心遣いが嬉しかった。

今は、そのことを考えたくない。

これから、みくるは、楓と流歌、二人分の罪悪感を背負って生きていくだろう。

しかし、そんな事は、今は考えなくてもいいだろう。

「綺麗な夕焼けね・・・」

「うん、燃えるような、朱色」

「すみません、もう、面会終わりなんですけど・・・」

看護婦がドアから顔を出した。

「あらずみません。みくる、じゃあ、明日また来るからね」
「うん、ばいばい」

それにしても・・・

本当に、綺麗な夕焼けだ・・・。

明日は、晴れるね。

・・・ひた・・・

・・・

聞きたくなかった。こんな幻聴は・・・。

やっぱり、うちは楓を見た。あれは幻だ。

だが、うちの中の楓は、うちを呪い殺すつもりなんだ。

現に、今、うちの心は、恐怖と、それと同量の罪悪感で押しつぶされそうになっている。

お願い。

あたしを許して。

それが、あたしの望み。

ひた・・・。

ベット下から、足音が聞こえる。

ココにいるのか・・・。

ずっ・・・。

ずっ．．．ずっ．．．ずっ．．．ずっ．．．ずっ、
．．．ずっ．．．ずっ．．．

真夜中の病院の暗い廊下に

不可解な音が響いていた。

まるで。

まるで何かを引きずるような、不可解な音が。

13 綾瀬未来（前書き）

やっと完結です。待たせてごめんなさい・・・とか、待ってる人なんていないか（笑）

13 綾瀬未来

「綾瀬さん？ 綾瀬未来さん？ 検温の時間ですよ？」
看護婦が、みくるのベッドのカーテンを勢いよく引いた。
「あれ？」
そこにみくるの姿はなかった。

「みくるさん？？ ねえ、どこにいるの？！」

職員総動員で、病院中を探したが、結局見つからなかった。

一ヶ月後。

みくるの母は嘆き悲しみながら、自宅の二階にいた。

自分もみくるを探した。

病院内も、町内も。

近所の人々にも協力をあおいだ。

警察にも搜索願を出した。

だが、結局みくるは見つからず。

けして暇ではない警察は、搜索を打ち切ってしまった。

一ヶ月たった今も、母は希望を捨てきれずにいる。

心の底では分かっている。

赤ん坊ではない。

生きていれば、無事であれば、必ず連絡ぐらいはよこすだろう、と。

しかし、同時に母として、みくるを死んだものと諦めたくはなかった。

今、母はみくるの部屋に立ち、みくるの痕跡を眺めながら、静かに涙を流していた。

みくるのベット。

みくるの机。

みくるが大切にしていたぬいぐるみ。

みくるがキレイに飾りつけたカレンダー。

「みくるの」

「みくるが」

があふれていて。

直視できるものではない、が。

せめて、みくるの生きている、生きていた証が。

心の傷を埋めてくれればと、母は部屋を飽きることなく眺めていた。

しばらくして落ち着いた母は、みくるの部屋を歩き回り始めた。

ベッドの下を覗き込んだり、棚を探ってみたり。

みくるがここにいれば、眉をしかめて

「お母さん！ やめてよもう！」

と怒るだろうと分かっている、てがかりがないかと探していた。

みくるの所在に関して、生死に関して。

あるわけがないと思う心の片隅で、『もしかしたら』と思いながら。

そして、机の引き出しを開けた時。

一冊の薄いノートを見つけた。

『日記』

だった。

- - - - -
その後、みくるの姿を見たも
- - - - -

ひた

足音は、復讐をつれてくる・・・。

足音がひとつ

END

13 綾瀬未来（後書き）

長い間ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7572d/>

足音がひとつ

2010年10月9日06時21分発行